



ゾ ラ

居酒屋 生きるよろこび
実験小説論

河内清・田辺貞之助訳

世界文学大系

41

筑摩書房版

世界文学大系 41

ゾ ラ

昭和34年2月20日発行

定価 450 円

編 者 河 内 清

発 行 者 古 田 晁

印 刷 者 山 元 正 宜

発 行 所 株式会社 筑 摩 書 房

東京都千代田区神田小川町2の8
振替東京 165768 電話(29)局 7651

目次

居酒屋

生きるよろこび

実験小説論

ゾラについて

解説

年譜

河田 辺貞之助 訳 5

河内 清訳 253

河内 清訳 441

ル平岡 ト昇 訳 461

河内 清 476

483

裝
幀
庫
田
寮

ゾ

ヲ

101 /
Lettre à M. Félix Faure
[Président de la République]

Monsieur le Président,

Me permettez-vous, dans ma gratitude pour le bienveillant accueil que vous m'avez fait un jour, d'avoir le souven de votre juste gloire et de vous dire que votre étoile, si heureuse jusqu'ici, est menacée de la plus honteuse, de la plus infamante des taches?

Vous êtes sorti sain et sauf des basses calomnies, vous avez conquis les cœurs. Vous apparaissez rayonnant dans l'apothéose de cette ~~grande~~ fête patriotique que l'alliance russe et a été pour la France et vous vous préparez à présider au solennel triomphe de notre Exposition.

居酒屋

一

ジェルヴェーズは明け方の二時までランチェを待った。それから、胴着のまま窓の冷たい風に当たっていたのでぶるぶる震えながら、寝台にはすかいに横たわり、熱に浮かされ、涙に頬をぬらしながら、眠ってしまった。一週間ばかり前から、彼は《双頭の仔牛軒》でいっしょに食事をすまして出ると、彼女だけ子供たちとやすみにかえし、自分は仕事をさがしてくるなどといつて出かけて、いつも夜ふけてからしか帰ってこなかった。昨夜もジェルヴェーズが彼の帰りをうかがっているとは、彼がグラン・バルコンのダンス・ホールにはいつてゆくのが見えたような気がした。ホールのかがやく十個の窓は火事場のような光の幕で市外の大通りの暗い流れを照らしていた。彼のうしろには、金物研ぎの女工で、同じ食堂で食べている小柄なアデールが、五、六歩おくれて歩いてくるのが見えた。女は入口の丸笠ランプのどぎつい光のしたをいっしょにとおらないように、たった今彼の腕をはなしたばかりといったかっこうで、両手をぶ

らぶらさせていた。

ジェルヴェーズは、五時ころ、からだはしこり、腰もくだけて、目をさますと、どっとむせび泣いた。ランチェはかえってこなかった。彼ははじめて外泊したのだ。彼女は、細いもで天井につけられた細木からたれさがる、色あせたベルシャ更紗のぼろ布のしたの寝台の縁に、ぼんやりと腰をおろした。そしてゆっくりと、涙にうるんだ目でもって、みすばらしい家具つき部屋をみまわした。そこには引出しがひとつとながなった胡桃の箆がひとつ、わら椅子が三つ、脂じみた小卓がひとつあるだけで、小卓のうえには縁のかけた水差しがのつていた。さらに子供たちのために鉄の寝台がひとつもこまれていたが、それは箆のまえをふさぎ、部屋の三分の二も占めていた。片すみにジェルヴェーズとランチェのトランクが大きく口をあけていて、からっぽの腹をあらわに見せ、底のほうに古ぼけた男帽子が汚れたワイシャツと靴下のしたにおしこまれていた。いっほう、壁にそって、家具の背のうえに、孔のあいたショール、泥によこれたズボン、古着屋も相手にしないよれよれのぼろ着物がかかっていた。暖炉のうえの棚のまんなかには、不揃いなふたつの鉛の燭台のあいだに、うすいバラ色をした公設質屋の受取証が一束のつていた。それはこのホテルのひくい部屋で、大通りに面する二階にあった。

そのあいだ、ふたりの子供は同じ枕に並んでねて、眠っていた。八つになったクロードは、かわいい両手を蒲団の外に投げだして、ゆつくりと長い寝息をたてていた。いっほうエチエンヌは四つになったばかりで、片方の腕を兄の頸にかけてはほえんでいた。母親の泣きぬれた瞳が子供たちのうえにおちると、彼女はまたしても、どっとむせび泣いたが、ほとぼしりする軽い叫びをおし消すために、口にハンカチを押しつけた。それからだしのままで、落ちた古靴をはこうともせず、ふたたび窓ぎわにもどって腕をつき、遠くの歩道をさがしながら、昨夜と同じように待ちはじめた。

ホテルはラ・シャペル大通りに面し、ボワソニエール市門の左手にあたっていた。三階建の荒屋で、三階まで酒糟色に赤くぬられ、鋸戸は雨にくさっていた。ふたつの窓のあいだは、ガラスにびびのはいった角燈のうえには、こう書かれているのが読めた《マルスリエ経営ボンジュール館》。それは黄色い大きな文字だったが、壁土にかびがはえて、ところどころ消えていた。ジェルヴェーズは角燈がじまになったので、唇にハンカチをあてたまま背のびした。彼女は右手のロッジシエワール大通りのほうをながめた。そこには屠殺業者の群れが血まみれの前掛姿で屠殺場の前にかたまっていた。涼しい風がときどき悪臭を、殺された家畜の生ぐさい匂いをこんできた。ついで左手にのびる、長いリボンのような街路を見とおし、真正面に近いところに、そのころ建築中だったラリボワジェール病院の白い建物に目をつけた。それからま

た地平の端から端へと、入市税関の壁にゆつくりと目をうつした。その壁の向こう側では、夜になると、おりおり殺される男たちの悲鳴がきこえたものだった。彼女は腹を短刀でつきさされたランチエの死体をみつけないかと恐れながら、かけ離れた街角や、湿気と塵芥でよこれた暗いすみずみをさぐった。一本の荒地の帯で市街をかこむ、あの灰色のはてしない城壁の

かなたに目をあげると、はやくもバリの朝のどよめきにみちた大きな光が、太陽のかけらがみえた。だが、入市税関のすんぐりした二むねのバラック建のあいだを、モンマルトルやラ・シヤベルの高台からおりてくる、人や馬や荷車のたえまない流れにみとれながらも、彼女がいつも顔をのばして目をむけたのは、ポワソニエールの市門だった。そこには人々のざわめきが、突然何かが道をふさいだために歩道のうえに淀みとなつてひろがった群衆の、道具を背中にバ

ンを小脇に仕事場へゆく労働者たちのはてしない行列があつた。そして山なす群衆はパリになだれこみ、そこにたえまなく溶けこんでいった。ジェルヴェーズはこうしたすべての人々のあいだにランチエの姿をみかけたように思うと、落ちるのにかまわずいつそう前に身をかがめた。それから苦痛を押しこもうとするかのように、いつそう強く口にハンカチをおしあてた。

そのとき若々しい陽気な声が彼女を窓からひきはなした。

「旦那は、おるすらしいね、ランチエの奥さ

ん！」

「そうよ、るすよ、クローボーさん」と彼女はしてほえんで答えた。

それはホテルのずっと高いところで十フランの小部屋を借りているブリキ屋の職人だった。肩に袋をひっかけていた。入口の扉に鍵をみたので、きさくにはいつてきたのだ。

「実はね、今、おれはあそこの病院で働いてるんだよ……どうだね！ 五月だというのに、この陽気は！ 今朝はひどくびりびりするじゃないか」と彼はつづけた。

そしてジェルヴェーズの涙で赤くなった顔をみつめ、寝床がかたづけでないのを見ると、かるく首をふった。それから天使のようなバラ色の顔をしてあいかわらず眠っている子供たちの小さな寝床までやってきた。そして声をひそめていった。

「なんだね、どうも旦那がちよっぴりよくないらしいね、……だが心配するこたはないよ、奥さん。あのひとは政治に夢中なんだ。こないだもよ、ウージェエヌ・スュの投票のときには、ありやいひとらしいが、旦那はまるで気違ひだったぜ。たぶんあのボナパルトの道楽者の悪口をいつて仲間と夜あかししたんだろう」

「ちがうわ、ちがうわ」と彼女はやつとのことてつぶやいた、「あんたが思つてるようなことじゃないわ。あたしにはランチエがどこにいるかわかつての……あたしたちにも、人並みに苦勞があるのよ、しかたがないわ！」

クローボーは目ばたきして、この嘘にだまされたいことを示した。それから、もし彼女が外出したくなかったら、牛乳をとりにいってやろうといて、出ていった。彼は彼女を美しいまじめな女だと思い、いつでも困るときには力になつてやるつもりだった。ジェルヴェーズは彼が出てゆくとすぐ、また窓によりかかった。

市門では朝の寒さのなかに人々のざわめきがつづいていた。錠前屋は青い作業服で、石工は白い上着で、ペンキ屋は長い仕事着のうえにはおった外套で、それと見分けがついた。この群衆は遠くからでは灰色にばやけて、うすれた青とよごれた灰色のかかったあいまいな色合を示していた。ときどき、ひとりの労働者がたちどまって、パイプに火をつけた。だが、まわりの連中はあるきつづけ、笑いもせねば、仲間にひとこと声をかけるでもなく、土色の頬をした顔をひたすらパリに向け、フォブール・ポワソニエールのだだっぴろい街をとおる、ひとりずつパリに吞まれていった。しかし、ポワソニエ街のふたつの片すみでは、鑑戸をあげた二軒の酒場の入口で、いくたりかの男たちが歩みをゆるめた。そしてはいるまえに、はやくも一日ぶらぶらするつもりになり、腕もだらりと力のぬけたかっこうで、パリを横目でながめながら、歩道のはしに立っていた。売台のまえでは、客の群れが互いに酒をおごりあい、ぼんやり突っ立って広間をうずめ、唾をはいたり、咳をしたり、ちびちびやって喉をうるおしたりしていた。

ジェルヴェーズは街の左手のコロンブ親爺おやじの店に目をくばった。ランチエの姿をみかけたように思ったからだ、そのとき前掛姿で何もかぶらぬひとりの太った女が、車道のまんなかから彼女をよんだ。

「ねえ、ちよいと、ランチエの奥さん、ずいぶん早起きだわねえ！」

ジェルヴェーズはからだを前にかがめた。

「おや！ あんただったの、ボツシュの奥さん！……ほんとに、あたし今日はどっさり仕事があるのよ」

「そうだろうねえ！ 仕事ってものは、何だつてひとりでは済みやしないものねえ」

こうして窓と歩道のあいだに話のはじまった。ボツシュのかみさんは、階下を《双頭の仔牛軒》に貸している家の門番だった。ジェルヴェーズは飲み食っている男たちのなかにまじつて、ひとりで物を食べるのがいやさに、ときどき彼女の部屋にはいつてランチエをまつことがあった。門番の女は、亭主がある勤め人のフロックの修繕をやることになっているが、品物がなかなかもらえないので、これからひとつばしりラ・シャルボニール街までいって、お得意の寝込みをおそうのだと話した。それから、自分の家の間借人のひとりが、昨晩女をつれこんで、朝の三時までみんなをねかさなかつた話をした。だが、彼女はおしゃべりに夢中になりながら、鋭い好奇心にかられた様子で、若い女房をしげとみつめた。彼女は様子を知らな

いばかりにそこへきて窓のしたに立つたようだった。

「ランチエさんはまだ寝てるの？」とだしぬけに彼女はたずねた。

「ええ、寝てるの」とジェルヴェーズは答えたが、面を赧はためないわけにゆかなかつた。

ボツシュのかみさんは涙が彼女の目ににじむのを見た。それでいちおう気がすんだらしく、男なんでものはとんでもないろくでなしだといながら遠ざかったが、すぐに引きかえしてきて叫んだ。

「今朝だったわね、あんたが洗濯場にゆくのは？……わたしも洗濯物があるから、隣りに場所をとつてあげるわ、そして、いろいろお話をしましょうよ」

それから突然憐れを感じたかのように、「かわいそうにね、そんなところにいないほうがいいわよ、風邪をひくわ……顔色がよくないわよ」

ジェルヴェーズはそれでも窓にがんばって、八時まで二時間待ちあぐねた。商店はすでに開き、高台からおりてくる作業服の潮はもうとまった。いくたりか遅刻したものだけが大大たに市門をこえていった。酒場では同じ男たちがあいかわらず立ったまま飲んだり咳をしたり唾をはいたりしていた。男工のあとにつづいて金物研ぎや仕立屋や花屋の女工たちが、うすい服に身をひきしめ、市外の大通りに沿ってちょこちょこと歩いていった。彼女らは三人か四人づ

れで、かるい笑い声を立てたり、きらきらする目をあたりに投げたりしながら、元気よくしゃべっていた。だがごくたまには瘠やせせて蒼白く生まじめな様子をしたのが、ひとりつきりで、泥水の流れをよけながら、入税関の壁にそっていった。それから勤め人たちが、歩きながら手をふいて暖めたり、一スウのパンをかじったりしながら通っていった。短かすぎる服をつけ、疲れた目をした、まだ眠りからさめきらぬ、やせぎすな若者もいた。長い勤めの時間に疲れて土色の顔をした小柄の老人たちが、二、三秒の狂いもなく足どりを時間にあわせようとして、時計をのぞきこみながら、すたすたと歩いていった。やがて、大通りは朝の平和にかえり、近所の年金生活者たちが陽をあびて散歩をはじめた。髪もスカートも汚れた母親たちが赤児をかかえてゆすぶったり、ベンチでおむつをかえたりした。だらしなやかっこうをして涙をたらした小せがれどもがわめいたり、赤ん坊たちの笑ったり泣いたりするなかで、押しあいへしあい、地面をころげまわった。今ではジェルヴェーズは希望がつきはて、心配に気が遠くなり、息がつまるようだった。いっさいが無に帰し、時間もおしまいになり、ランチエはもう二度とかえってこないように思った。そこで、とほうにくれた目をして、虐殺と悪臭とで黒くよごれた古い屠殺場から、いく列の窓のまどうつろな孔をとおして、やがて死が跳梁をほしきままにするにちがいない、むき出しの広間をみせている

蒼白い新しい病院をながめた。彼女の正面では入市税関の壁のかたに、大空がかつと輝き、パリの巨大な目覚めのうえに、見る見るふくれてゆく朝の太陽が、目をくらませた。

若い女はもう泣くのをやめ、手をだらりと垂らして、椅子のうえにかけていた。そのときランチエが静かにはいってきた。

「まあ帰ってきたのね！ 帰ってきたのね！」

と彼女は叫んで彼の頭にとびつこうとした。

「ああ、帰ったよ、だからどうだったんだい？ ばかなまねなどよしてくれ、おねがいだ！」と彼は答えた。

彼は彼女をおしのけた。それからふきげんな身振りで箆笥のうえに黒い中折帽子をさっと投げだした。それは二十六の若者だった。濃い栗色の髪をしたきれいな顔だちの小男で、うすい口髭をたくわえ、しゅっちゅう機械的な手つきで、その髭をちぢらしていた。彼は労働者のズボンと、腰でつまんだ汚れた古いフロックをまとっていた。話すとプロヴァンスなまりがきわだった。

ジェルヴェーズはまた椅子に腰をおとして、きれぎれな言葉で静かに愚痴をいった。

「あたし眠れなかったわ……あんたに何かわるいことがおこったのじゃないかと思って……どこへ行ったの？ 昨夜はどこで寝たの？ ほんとに！ もう二度とこんなことしないでね、あたし気違いになってしまうわ……ねえ、オーギュスト、どこへ行ってたの？」

「用事のあったときさ、むろん！」と彼は肩をあげながらいった。「八時にはラ・グラシエールの帽子工場をつくるはずの友だちのうちにいたが、そこで遅くなっちゃったので、やつところへ泊ることにしたんだ、……それに、わかっているだろうが、おれは自分のやることをいちいちきかれるのがきらいなんだ。そつとしといてくれ！」

若い女はむせび泣きをはじめた。ランチエのどなり声やあらつばい所作で、椅子がたおれ、子供たちが目をさました。彼らは裸にちいかつこうで寝床のうえにおきあがり、かわいい手で髪の毛をかきむしった。だが母親が泣いているのをきくと、彼らもまた、まだ開ききらぬ目で泣きだして、恐ろしい叫びをあげた。

「ああ！ やかましい！」とランチエは憤然として叫んだ。

「はつきりいっとくが、おれはまた出てゆくぞ、おれは！ ほんとに行ってしまうぞ、今度は……だまらないか？ じゃおやすみ！ ゆうべの家にかえる！」

彼ははやくも箆笥のうえの帽子をとった。だがジェルヴェーズがとびだしていつて、どもりがちにいった。

「だめよ、だめよ！」

それから彼女は子供たちをいろいろと愛撫してその泣き声をおし消した。彼女は彼らの髪にくちづけしてやり、やさしい言葉をかけてやってもう一度ねかした。子供たちはたちまちおと

なしくなり、枕のうえで笑いながら、つねりつこをして遊んだ。そのあいだに、父親のほうは、長靴をぬぎもしないで、寝床のうえにからだを投げだしていたが、疲労困憊した様子で、顔は徹夜のために薄汚れていた。彼は眠らず、目を大きくひらいたままで部屋のあちこちをみまわした。

「ひどいな、ここは！」と彼はつぶやいた。

それからちよつとジェルヴェーズをみて、意地わるくつけたした。

「おまえはもう顔もあらわなののか」

ジェルヴェーズは二十二になったばかりだった。大柄だが、顔だちが華奢で、どこかほっそりした感じだった。だが、その顔ははやくも生活の厳しさにやつれていった。髪をみだし古靴をはき、所帯道具の塵や脂をすいとった白い胴着姿でふるえている彼女は、心配と涙で幾時間かをすごしたために、十年もふけたようだった。だが、ランチエのこの言いぐさをきくと、それまでのおびえあきらめた態度をすてた。

「ひどいことをいっわね」と彼女は気色ばんでいった。「あんただって知ってるはずよ、あたしができるだけのことをしてるってこと。あたしたちがこんな落ち目になったって、あたしのせいじゃなくってよ……お湯をわかす竈さえない部屋で、子供のふたりもかかえて、あんた自分でやってみたいわ……パリについて、むだづかいなんかないわ……前から約束していたように、すぐ身を立てればよかったのよ」

「なんだって！ おまえだっておれといっしょにあの金をかじったんじゃないか。今になって食った御馳走に唾をはきかけるなんて、虫がいてことよ！」と彼は叫んだ。

しかし彼女は彼のいうことを聞いているようにはみえなかった、そしてつづけた。

「とにかく、元氣を出せば、まだなんとか始末がつくわ……昨日の晩、新町で洗濯屋をしているフオーコニエの奥さんにあつたの。月曜日にあたしを雇ってくれるそうだよ。あんたがラ・グラシエールのお友だちといっしょにやれば、あたしたち六カ月とたたないうちに元どおりになるわ。そのあいだに着物もなんとかできるし、どこかにあたしたちの家として住めるねぐらも借りられるわ……ああ！ どうしても働かなければだめよ、働かなければ……」

ランチエはもの憂げな様子で壁のほうへねがえりをうった。そこでジェルヴェーズはかっとなつた。

「ほんとに、そうだよ、あんたが仕事が好きじゃないってことはわかってるわ。あんたは野心でいっぱいのよ、旦那さまみたいな装をして、絹のスカートをはいた淫売を引っぱって歩きたいのよ。そうでしょう？ あたしの着物をみんな質屋にはこぼせてからは、あたしがすっかりお気に入りになつたのよ……それはそうと、オーギュスト、これはあたし、あんたに話したくなかつたし、もっとあとにしたかつたのだけど、あたし知ってるのよ、あんたが昨夜どこで

寝たのか。あんたがあのアデルのうすのろと、グラン・バルコンにはいるのをみかけたの。ほんとに！ あんたは目がこえてるわねえ！ あの娘はきちんとしてゐるわ！ 女王さまみたいなかつこうをしているのもつともよ……食堂じゅうの男たちと寝たんだもの」

ランチエはがばつと寝台からとびおりた。その眼は蒼ざめた顔のなかでインクのように真黒くなつた。この小男の場合、怒りは嵐をまきおこした。

「そうよ、そうよ、食堂じゅうの男たちとよ！」と若い女はくりかえした、「ボツシユのおかみさんはあいつらを、あいつとあいつのつかい薄のろの姉とを追いつ出そうとしてんのよ、しよっちゅう階段に男たちがつかめかけるんですもの」

ランチエは両の拳をふりあげた。だが彼女をなぐりたい欲求をおさえて、彼女の両腕をつかまえ、猛烈にゆすぶって、子供たちの寢床のうえに突き倒した。子供たちはふたたび泣きだした。そこで、彼は男がためらっていた決心をきめるときの残忍な様子で、こうどもりながらまた寝てしまった。

「おまえにはわからないんだ、自分のたつた今やつたことがな、ジェルヴェーズ……おまえはとんでもないことをしたんだぞ、今にペソをかくんだからな」

子供たちはしばらくむせび泣いていた。母親は寢床の縁にかがみこんで、彼らをいっしょに

抱きしめた。そして二十度も単調な声でこうくりかえした。

「ああ！ おまえたちさえないなければねえ、かわいそうに！……おまえたちさえないなければねえ！……おまえたちさえないなければねえ……」

静かに横になって、自分のうえの色あせたベルンシャ更紗のぼろ布をみあげていたランチエは、もう妻の哀訴を聞こうともしないで、ある依怙地な考えに没頭した。そして、まぶたのしかかる疲労にもかかわらず、睡気にまけず、一時間近くもじつとしていた。彼が冷酷な断固とした顔で腕をついてふりかえると、ジェルヴェーズは部屋のかたづけを終ろうとしていた。彼女は子供たちを起して着物をきせ、その寢床の始末をした。彼は彼女がそこいらを掃き、家具類を拭くのをみつめていた。それにしても部屋は黒くよごれて哀れっぽく、天井は煤け、壁紙は湿気ではがれ、三つの椅子も箆筒もびっこで、こびりついた垢は雑巾をかけてもとれなかつた。それから、彼が髻そりにつかつていた、窓の掛金につるしたまろい小鏡のまえで、彼女が髪をときあげてから、水をさぶさぶつかってからだを洗っているあいだ、彼は彼女のあらわな腕やむきだしの頸、彼女のみせる裸身のすべてを、あたかもさまざまな比較が心にわきおこるのかのようにつくづくながめていた。そしてちよつと唇をとがらせた。ジェルヴェーズは右脚でびっこをひいた。だがそれは疲労した日、腰の力が

ぬけて、なげやりな気持になるときしか、ほとんどひと目につかなかった。だが今朝は昨夜のことで疲れきっていたので、脚をひきずったり、また壁によりかかったりした。

沈黙があたりを支配した。ふたりはもう一言もかわさなかった。彼は彼女が折れてでるのを待つたのようだった。が、彼女のほうは、心配にわくわくしながらも、何げない顔をするように努めて、仕事を急いだ。彼女が片すみのトラックのうしろに投げこんであつた汚れ物の包みをつくっていると、彼はとうとう口を開いてたずねた。

「なにをしてるんだい？……どこへゆくんだい？」

彼女ははじめは答えなかった。そこで彼が怒ってかさねてたずねると、彼女は心をきめた。

「見ればわかるでしょうにね、これを洗いにゆくのよ……子供たちを泥んこにしておけないもの」

彼は彼女が二、三枚ハンカチをあつめているあいだ黙っていた。そして、短い沈黙のあとでもう一度言葉をかけた。

「おまえ金をもってるか？」

彼女はその言葉をきくととたんに身を起こし、手にしていた子供たちの汚れたシュミーズを放しもせず、彼の顔をじつとみつめた。

「お金だって！ まさかあたしがどこかで盗んできやしましいし、あんたよく知ってるじゃないの、一昨日あたしの黒いスカートに三フランし

かなかつたってこと。それであたしたち二度お昼をたべたのよ、それから豚肉を買ったんで、すぐなくなつちまつたわ……あるもんですか、お金なんか。洗濯場の四スウが残っているきりだわ……どこかの女たちのようにあたしはかせがないんですからね」

彼はこのあてこすりを氣にとめなかった。寝台からおりて、部屋のまわりにかかつているいくらかのぼろ布をみてまわつた。それからズボンとショールをはずし、筆筒をあけて、女物の胴着一枚とシュミーズ二枚を包みにたした。そして、その全部をジェルヴェーズの腕に投げてやつた。

「そら、こいつを質屋にもつていきな」

「子供たちももつてもらいたくないの？」と彼女はたずねた。「どう！ 子供でお金を貸してくれたら、厄介払いができるでしょうにね！」

とにかく彼女は公設質屋に出かけていった。半時間ばかりしてかえつてくると、暖炉台のうえに一枚の五フラン銀貨をおき、ふたつの燭台のあいだの受取証にこんどのを加えた。

「これだけくれたわ。六フラン欲しいといったんだけれど、だめだったの。ああ！ あそこは破産などしつこないわね……いつだってお客がたくさんきているわ、あそこには！」と彼女はいった。

ランチェはその五フラン銀貨をすぐ取りあげはしなかった。彼女がそれを細かくしてそのい

くらかをくればいいと思ったのだろう。だが筆筒のうえに紙にくるんだハムの残り、パンの切れっぱしをみつけると、心をきめて五フラン貨をチョッキのポケットにすべりこませた。

「あたし牛乳屋へはいたちの道なの、一週間も勘定をしないんですもの」と彼女は説明した、「でもあたし早くかえつてくるわ、あたしのる

すのあいだにパンとカツレツを買つて下さいよ、そうすればお昼がたべられるわ……それから、ブドウ酒も一リットルとつてね」

彼はいやとはいわなかった。仲直りができそうだった。若い女は汚れた下着類をからげてしまった。だが彼女がトランクの底のランチェのワイシャツや靴下をとろうとすると、彼はそれをのこしておくように叫んだ。

「おれの下着はほつといてくれ、わかったな。洗わなくていいんだ！」

「どうしていいの？」と彼女は起きなおってたずねた、「もちろん、こんなに汚れたのをもう一度きるつもりじゃないでしょう？ 洗わなきゃだめよ」

彼女はいつこう気持のやわらいだ様子のない、さつきと同じ冷酷さをまたも相手の美青年の顔にみとめて、おどおどしながら、目をみはつた。彼は、怒って彼女の手から下着をひたつて、トランクに投げこんだ。

「畜生め！ 一度ぐらいおれのいうとおりにしろ！ いいといってるじゃないか！」

「でもどうしてなの？」と彼女は恐ろしい疑い

に傷つけられて蒼くなりながら、かさねていった。「あなたにはもう下着などいらないはずだわ、出かけるわけじゃないでしょう……あたしがそれをもつていったって、あなたに何のさしかえがあつて？」

彼は自分のうえにくぎづけになった彼女の燃えるようなまなざしにおされて、ちよつとたじろいだ。

「なぜだつて？ なぜだつて？」と彼はどもりながらいった……「畜生！ おまえはあつちこちに、おれを食わしてゐるだの、洗濯や繕いものをしてやつてゐるだの、いいふらしてゐるくんだらう！ だから、おれや癪にさわるんだ！ おまえはおまえのことをしろ、おれのことはおれがする……洗濯女が野良犬のために働くことはないよ」

彼女は下手にでて、一度だつて愚痴をこぼしたことはないと言ひわけをいった。しかし彼は乱暴にトランクを閉め、そのうえに腰をおろして、彼女の顔に、だめだ！ とどなった。そして、自分の持ちもののうえから榎子でも動かうとしなかつた。やがて彼は、自分をしつこく追いまわす彼女の視線からのがれるために、ひどく眠い、もうこれ以上うるさいことを言うなといつて、寢床にもどつて、横になった。事実、こんどは眠つてしまふようだった。

ジェルヴェーズはしばらく気がきまらなかつた。足で下着の包みを片すみへおしやつて、そこへ坐つて縫物をしようかとも考えた。だが、

ランチエの規則ただし息づかいがけつきよく彼女を安心させた。そこでこのまゝ洗濯したときの残りの青い染粉の玉と石鹼の切れつぱしをとり、窓のまゝで静かに古いコルク倒して遊んでいた子供たちのところについて、小声でこいいいながら接吻してやつた。

「おとなしくしてるんだよ、さわがないでね。パパが眠ってるからね」

彼女が部屋を出ていったとき、クロードとエチエンヌのおだやかな笑い声だけが暗い天井のしたの大きな沈黙のなかにひびいていた。十時だった。一筋の光が半開きの窓からさしこんでいた。

大通りにでると、ジェルヴェーズは左にまがつて、グロート・ドル街の新町を歩いていった。フォーコニエ夫人の店のまゝをとるときには、かるくうなずいて挨拶した。洗濯場はこの街のまんなかへんで、舗道がのぼりになりはじめるところにあつた。屋根の平らな建物のうゑに、三つの巨大な水槽のボルトでしっかりと緊められた亜鉛筒が、灰色の円味をみせていた。そのうしろの、非常に高い三階が乾燥場で、周囲を風のよくとおる薄板の鎧戸でかこみ、なかには真鍮の針金に干してある下着類がみえていた。水槽の右手では蒸気機関の細い管が、荒い規則ただし息吹きで、白い煙を吹きだしていた。ジェルヴェーズは水たまりになれた女らしく、スカートをまくりあげることもしないで、漂白粉をとかした壺の目白押しに並んだ入口をはい

つていった。彼女はもう洗濯場の女主人と知り合いになつていた。それは目の悪い、かぼそい感じの小柄な女で、自分のまゝに帳面をおき、重ね棚に石鹼棒をならべ、ガラス瓶に青い染粉の玉をいれ、さらに幾ポンドかの重曹包みも置いて、ガラス張りの小部屋に納まつていた。彼女は通りがかりに、そこで女主人からこのまゝ洗濯にきたときにあずけておいた自分の洗濯棒とブラッシをもらつた。それから自分の番号札をとつてなかにはいった。

それは鑄鉄の柱のうゑに組み立てられ、明るい広やかな窓をめぐらした、天井の平らな大梁の浮きだした広い部屋だった。蒼白い豊かな真屋の光が、乳色の霧のようにただよっている熱い湯気のなかに自由にさしこんでいた。湯煙があちこちからたちのぼり、あたりにひろがつて、青味がかつたヴェールで奥のほうをぼやかしていた。味気ない、湿つた、消えやらぬ、石鹼の匂いをふくんだ重くるしい湿気が降つていた。ときどき漂白素の一段とつよい息吹きが吹きとおつた。洗ひ場には、中央の通路の両側に、幾列もの女がならんで、腕は肩まであらわにし、頭もむきだし、たくしあげたスカートから色模様の靴下や大きな編上げ靴をみせていた。女たちは激しくたいたり、笑つたり、この騒ぎのなかでは一言ものをいうにものけぞり、バケツの底までかみこんだりしてしたが、どの女も穢ならしく荒つぽく見苦しく、驟雨にでもあつたように濡れしよばたれ、肉体は紅潮して湯気

をたてていた。そのまわりや足もとでは、湯水が大川のように流れていた。熱湯の桶はひきまわされて一息にぶちまけられたし、冷水の水栓は開けっぱなしで高いところから水をおとし、洗濯棒は水をはねとばし、ゆすがれた下着はしずくをたらし、足もとの水たまりは、傾斜した石畳のうえを幾筋もの小川をなして流れていた。そして叫び声や調子をとった打棒の音や雨のように水のしたたるさざめきのなかに、湿った天井のしたで窒息するこの夕立の喧騒のなかに、こまかい露で真白になった、右手の蒸気機関が、まるでこのすさまじい騒ぎを指揮するかのよう、に、制動機を踊らせながら、たえまなく息をはずませてうなっていた。

ジェルヴェーズは左右に視線をなげながら、小さきみに通路を歩いていった。彼女は右往左往する洗濯女たちとぶつかりながら、腰をうかせ、洗濯包みを腕にかけて、一段と強くびっこをひいた。

「ちよいと！ こっちよ、奥さん！」とポツシュのかみさんが太い声でよんだ。

そこで若い女が左手のずつと端の彼女のそばにやってゆくと、門番の細君は半靴下をはげしい勢いでもんでいたが、仕事の手をやめもせず、とぎれとぎれに話しはじめた。

「そこでおやりよ、場所をとつてあげたのよ……ああ、あたしはもう長くかからないわ。ポツシュはあんまり下着をよごさないの……あんなはどうなの？ やっぱり長くはかからない

ようね！ あんたの包みも小さいわね。お昼まへにかたづけられるわ、そうしたらいっしょにお昼をたべにゆけるわ……あたし、これまでプーレ通りの洗濯屋に下着を出してたの。ところがその女自分の塩素やブラッシといっしょくたにして、わたしのものをみんなもっていつてしまふのよ。だから自分で洗うことにしたの。ずつと得だわ。シャボン代だけしかからないものね。……まあ、あんたの洗濯物ったら！ ほんとにあのわんぱく小僧たちときたら、お尻から油煙でも吹きだすみたいね」

ジェルヴェーズは包みをほどこいて、子供たちの下着をひろげていた。そこでポツシュのかみさんが灰汁水を一桶もろうようにすすめたので、彼女は答えた。

「あら、いいのよ、熱いお湯だけで充分だわ……いつもそうしてるんですから」

彼女は下着を選びわけ、いくつかの色模様のものを別にした。それから自分のうしろの水栓から水を四杯くんでバケツに充たし、それへ白くしあげて両膝のあいだにはさみながら、木杵のなかにはいった。立ててあるその木杵は彼女の腹までとどいた。

「いつもですって？」とポツシュのかみさんがくりかえした、「それじゃあ故郷では洗濯屋さんだったの？ あんた」

ジェルヴェーズは袖をまくりあげて、肱のほのかに赤らんだ、まだみずみずしいブロンド色

の美しい腕をみせながら、下着の垢をおとし始めた。水の浸蝕でくわれて白くなった洗いのせまい板にシュミーズをひろげて、石鹼でこすり、ひっくりかえして、裏側をこすった。返事をするまえに洗濯棒にぎってたたきはじめ、調子をつけた荒つぽい打撃で文句に区切りをつけながら叫んだ。

「そう、そう、洗濯屋だったわ……十のときにね……あれから十二年にもなるわ……川へ洗いにいったものよ……ここよりずつといい匂いだったわ……見せてあげたいわ、木陰の洗い場……きれいな水が流れてたつて……そら、ブラッサンでは……ブラッサンの町を知りませんか？ マルセイユのそばの？」

「すごいわねえ、ほんとに！ なんて荒つぽい女でしょう！ お嬢さんみたいなかわいい腕をしながら、鉄でもたたきのめしてしまいわ！」とポツシュのかみさんは洗濯棒の打撃の荒々しさにびっくりして叫んだ。

会話は甲高い声でつづいた。門番の細君は聞こえなくて、ときどきかみこまねばならなかった。白い下着はみんな、しかも充分にたたかれたが、ジェルヴェーズはそれをふたたびバケツに投げ込み、もう一度石鹼でこすり、ブラッシをかけるためにひとつひとつとりあげた。片方の手で洗った板に布切れをおしつけ、はまむぎの短いブラッシをもった片方の手でその下着から汚れた泡をしぼりだした。泡は長い涎となつて流れおちた。そこでブラッシのささやかな音

のなかで、彼女らは身を寄せて、いつそう親しげに語りあった。

「いいえ、あたしたち結婚はしてないの」とジェルヴェエズはつづけた。「あたし、かくしなどしないわ。ランチエは、あのひとの奥さんになりたと思うほどやさしくないの。子供たちさえなかったら、ねえ……長男が生まれたとき、あたしは十四で、あのひととは十八だったわ。四年おくらで次のが生まれたの……当然おこる事がおこったんだわ、まったく。家ではあたし、しあわせではなかったの。父のマツカールは、一口あげずに、あたしの腰をけとばしたわ。だから、ほんとに、外で楽しい目を見ようと思うのは当り前だわ、……あたしたちを結婚させようとしたひともいましたけど、どうしてだったか、忘れたが、ふたりの親たちはそうしようと思わなかったの」

彼女は白い泡のしたで赤くふくれた両手をふった。

「バリの水はずいぶんきついわ」と彼女はいった。

ボツシュのかみさんは今ではただもの憂げに洗っていた。彼女はここに居残って、二週間もまえから好奇心をそられていたこの来歴を知るために、洗濯を長引かせていたのだった。彼女の口は太柄な顔のなかでなかば開き、目はとびだしてきらめいていた。そして自分の推測に満足して、こう考えた。

「やつぱりそうなんだ、この娘はあんまりしや

べりすぎる。きつといさこざがあつたんだ」

それから声を高くしていった。

「ではあのひとは親切ではないのね？」

「その話はよしてちょうだい！」とジェルヴェエズは答えた。「あつちでは非常によくしてくれたわ、ところがバリにきてからは、あたし、もううまくやってゆけないの……あのひとのお母さんが去年死んで、あのひとにいくらか、といつても千七百フランばかりだけれど、残していったことも、お話ししなければならぬわ。あのひととバリにでたがったの。そこで、あたし、マツカールの父さんからむやみになくられていたので、あのひとといつしよに出かけることに同意したの。それで、あたしたちふたりの子供を連れて立ちましたの。あのひとはあたしを洗濯女にし、自分は帽子作りになって働くはずだったわ。そうなればずいぶんしあわせにくらせたでしょうにね……ところがあんだ、ランチエときたら野心家で、金づかいがあらう、遊ぶことしか考えないってひとなの。たいしたひとじゃないわ、けっきょく……とにかく、あたしたちモンマルトル街のホテル・モンマルトルに宿をとったの。それからつてものは、やれ夕食だ、馬車だ、お芝居だ、あのひとには時計、あたしには絹の衣装つてことになったの。お金があるときには、あのひとと気がよかつたのでね。ところが、あんだ、それからが大変なのよ、二カ月もたつとすつからかんになつちまつたの。そこでポンタール館に移つてきて、とんでもな

い生活をはじめたの……」

彼女はあふれてくる涙を呑みこんだので、たちまち胸がつまり言葉がとぎれた。下着はブラッシかけが終つていた。

「お湯をとつてこなきゃならぬわ」と彼女はつぶやいた。

だがボツシュのかみさんは、打明け話を中途でやめさせまいとして、通りがかった洗濯場の小僧をよんだ。

「ちよいと、シャルル、すまないが、この奥さんにお湯を一杯とつてきてやつてよ、急いでるんだから」

小僧は桶をとつて一杯にしてもつてきた。ジェルヴェエズは金を払った。一桶が一スウだった。彼女は湯をバケツにあけた。そしてブロンドの髪に灰色の湯気の糸をつける蒸気のただなかで、洗ひ板のうえにかがみこみながら、もう一度下着に石鹸をこすりつけて洗った。

「ねえ、ソーダをつかいなさいよ、あたしがあそこにもつてるから」と門番の女は親切にいった。

そうしてジェルヴェエズのバケツのなかに、もつてきた炭酸ソーダの袋を残らずあけた。それからまた漂白粉の水も彼女にすすめた。だが若い女は、脂のしみや酒のしみをとるにはよいけれどといつて断つた。

「すこし浮気者らしいわね」とボツシュのかみさんはそれと名ざさずランチエのことに話をもどした。

腰をふたつに折りまげて、両手を洗濯物につこんで握りしめていたジェルヴェーズは、たうなすくばかりだった。

「そうよ、そうよ、あたしも気がついたわ、ちっちゃなことだけれど、いくらも……」

だがジェルヴェーズがまっさおになって急に立ちあがり、彼女をにらみつけたので、彼女は今の言葉を取りつけた。

「あら！ 嘘よ、わたし何も知らないのよ……！ ただあのひと冗談好きらしいわね、それだけよ……わたしとこにアデルとヴィルジニイっていう娘がふたり住んでるの。あんた知ってるわね。ところが、あのひとその娘たちとよく冗談をいってるわ、たいしたことにはならないでしょうがね、きつと」

若い女は彼女のまえにすくと立ち、顔は汗だらけ、両腕からは滴をたらしながら、深いまなざしで彼女をじっと見つめつけた。そこで門番の女は困って、誓いの言葉をのべながらこぶしで胸をたたいて見せた。

「知らないといったら、何も知らないのよ、ほんとに！」

彼女はそれから平静にかえって、子供でもなだめるように、猫なで声でこうつけ足した。

「あのひとすなおな目をしてるじゃないの、あたしにはそう思えるわ……きつと、あんたと結婚するわ」

ジェルヴェーズは濡れた手で額をぬぐった。それからもう一度うなすきながら、水からもう

ひとつの着をひき出した。ふたりともしづらくだまりこんでいた。ふたりのまわりの洗い場も静かだった。十一時が鳴った。洗濯女の半分ほどは、片方の尻をバケツの縁にかけて、栓をぬいたブドウ酒の一リットル瓶を足もとにおき、ふたつに割ったパン切れにソーセージをはさんで食べていた。ただ小さな着の包みを洗いつてきている女中たちだけが、事務所のうえにかかっている円い掛時計をながめながら急いでいた。それで、洗濯棒の音がまだときどき、おだやかになった笑い声や、物をかむ顎の音でねばってきこえる会話にまじってきこえた。しかし、蒸気機関は休むひまもなく働きつづけ、広大な部屋をみたして、音を高め、震えひびくようだった。けれどもひとりの女もそれを聞いてはいなかった。それはまるでこの洗濯場の息づかいかと思われ、永遠にただよう湯気を天井の大きな梁のしたに積みあげるはげしい吐息のようだった。熱さは堪えがたくなってきた。太陽の光線が左手の高窓からはいり、たちのぼる蒸気を、乳色の光の幕で、甘美なぶいバラ色や灰青色に輝かせた。そこでそちこちにぶつぶついう声がおこったので、小僧のシャルルは窓から窓へと歩きまわって、厚い布地の窓掛をひいた。それから反対側の陰のほうにいてガラス扉をあけた。人々は喜んで拍手喝采した。みんながひどく陽気になってはしゃぎだした。やがて最後の洗濯棒も静まった。洗濯女たちは、もはや口をいしばいにし、手にもつ開いたナイフで身ぶりをし

てみせるばかりだった。ずっと端のほうで、火夫のシャベルが泥炭をすくっては機関の竈に投げこんでいる、そのさくさくという音が、規則ただしくきこえたほど沈黙は深くなっていた。そのあいだにジェルヴェーズはとっておいた濃い石鹸の湯をつかって、色もの下着を洗った。それが終るとひとつの脚立のところへいって、洗濯物をみんなそのうえにかけた。そのために床のうえに青い水たまりができた。それから彼女は水洗いにかかった。彼女のうしろでは水栓から冷たい水が大きなバケツに流れていた。この床に固定されたバケツには下着をささえる横木が二本わたしてあった。そのうえにはもう二本の横木がとおっていて、そこで下着類は完全に水を切られるのだった。

「それでもうおしまいになりそうね、ちようどよかったわ。あたし、あんたがしぼるのを手伝ってあげようと思つて待つたのよ」とボツシユのかみさんがいった。

「あら、それにはおよびませんわ。ありがとう、敷布でも洗うんだつたら、別だけれど」と若い女は清水のなかで色もの下着類をもんだり掻きまわしたりしながら答えた。

だがそうはいっても門番の女の手助けをうけねばならなかった。ふたりに端と端をつかんでスカートや染めのわるい栗色の小さな毛織物をしぼると、黄色っぽい水がしたたりでた。そのときボツシユのかみさんが叫んだ。

「おや！ 大女のヴィルジニイだわ……！ 何を